

氏名・（国籍）	王 奇（中国）
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	博甲第21号
学位授与年月日	令和3年3月10日
学位授与の要件	学位規程第2条第2項該当
学位論文題目	珍海の三論教理思想の研究
論文審査委員	主 査 教授 藤井 教公 副 査 教授 落合 俊典 副 査 教授 デレアヌ フロリン

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、日本平安末期の三論宗の学僧珍海（1091/1092 年－1152 年）について、彼の三論関係の著作を通じてその教理思想を解明しようとするものである。

珍海の三論宗関係の著作は『大乘正観略私記』一卷・長承三年（1134 年）、『三論玄疏文義要』十卷・保延三年（1136 年）、『一乗義私記』一卷・保延六年（1140 年）、『大乘玄問答』一二卷・久安五年（1149 年）、『三論名教抄』一五卷・（成立年代不明）などが現存する。本論では『大乘玄問答』と『三論名教抄』を参照しながら、『大乘正観略私記』、『三論玄疏文義要』、『一乗義私記』を中心として珍海における三論教理思想について検討を試みた。

筆者は第一章において小野玄妙氏、平子鐸嶺氏及び坂上雅翁氏などの先行研究を踏まえて、珍海の生涯と著作について考察を行い、学僧とする珍海の修学過程及び現存する珍海の著作の様態を明らかにした。結果として、珍海は平安末期の学僧として、当時の時代背景の下で三論、因明、法相、華嚴、密教、浄土等多宗の教義を兼修したことが分かった。

第二章において、筆者は珍海における三論宗著作の特徴について検討を行い、珍海は吉蔵の『大乘玄論』の八義科を重視しており、『一乗義私記』と『大乘玄問答』のような単独にして『大乘玄論』に対する解釈文を著したほか、『三論玄疏文義要』『三論名教抄』の中にも『大乘玄論』の趣旨に用いるところが多くことが分かった。更に『三論玄疏文義要』の著作年代について、珍海は保延六年（1140 年）の時、始めに三種方言の義を習得し、三論宗の重要な名目として『三論玄疏文義要』の中に写したと推測し、この著作は 1131 年から 1140 年までの間に完成したと推測した。

第三章において、珍海における一乗義に対する理解、及び『一乗義私記』の内容構成について検討を行い、珍海は吉蔵の著作と慧遠の著作を依用し、両師の思想を融合した上、独自性がある三乗と一乗との関係を解釈したことが分かった。更に吉蔵の『大乘玄論』「一乗義」

と珍海の『一乗義私記』に関する比較を通して、『一乗義私記』「釈名」の内容は『大乘玄論』「一乗義」の「釈名」の内容と相違することが分かった。

また、『一乗義私記』と『大乘玄論』「一乗義」との対照を通して、珍海の当時の『大乘玄論』は、現在の大正蔵経テキストと異なるものがあつたと確認でき、七軸を八軸に変えたのは異本の誤伝であると推測した。

第四章において、珍海における二諦、中道、正観、二智など三論宗の教学思想について検討を行った。そして、珍海にとって四重二諦と十種二諦は共に教に基づき、説法の重要点は二諦にあり、八不は三論宗の根本として、二諦と中道の義を包摂し、二諦を教門とし、中道を理法として位置づけたことが分かった。

更に、二諦という教説によって悟ったのは中道不二の理であり、この中道不二の理によって生まれたのは二智である。このような二諦、中道、二智という三者の関係を明らかにした。

第五章において、珍海に関する教判と、彼の三論宗教理思想の特徴について検討した。

教判について、珍海は吉蔵と同じ立場に立ち、仏の一代の教説を大乘と小乗の二つに分けられるが、根本法輪、枝末法輪、攝末歸本法輪という三輪説は衆生を一乗に入らせるための経教に対する判釈に過ぎないので、傍論と判釈したことが分かった。

更に教迹に対する検討を通して、教、理、智、境という三論宗の基本教学に関する繋がりを明らかにした。また、珍海は論述においても二諦の教義をもって解釈することが分かった。

珍海の三論宗教理思想の特徴について、筆者が速疾成仏と逆罪滅除という二方面から論述した。珍海が成仏思想において神通乗のことを重視しており、吉蔵と小異があることが分かった。また、逆罪滅除について、珍海は吉蔵に説かれる懺悔より重罪を軽罪に転じ、実相を観想することにより重罪が滅除できるという思想を受容した上、懺悔より罪が全て滅除できるが、果報はないとは言えない、正観による懺悔するは深刻であり、悪業が全て滅除できると主張することが分かった。更に、吉蔵の『大般涅槃經疏』の内容を引いて、重罪を犯した人にまず二乗に入らせ、更に二乗人の段階をもって無上道に到達させるということを強調した。

また、本論文の最後に、珍海の涅槃經思想も吉蔵を踏襲し、二諦に基づいて中道を涅槃の本とすることが分かった上、補充資料として、『三論玄疏文義要』に引用された『大般涅槃經疏』の逸文を整理して挙げた。

以上は本論文の内容要旨である。

論文審査の結果の要旨

本論文は、平安末期の三論宗の学僧珍海（1092年－1152年）について、その著作の検討を通じて彼の教理思想を解明しようとするものである。

珍海の現存する三論宗関係の著作のうち、本論文では『大乘玄問答』と『三論名教抄』を参照しつつ、『大乘正観略私記』、『三論玄疏文義要』、『一乗義私記』を中心として珍海の三論

教理思想について検討している。

本論文は、序論と五章からなる本論、それと結論によって構成されている。著者は序論で、問題の所在、先行研究と本論文の構成について触れ、第一章において小野玄妙、平子鐸嶺及び坂上雅翁氏などの先行研究を踏まえて、珍海の生涯と著作について考察を行い、珍海の修学過程及び現存する珍海の著作の現況を明らかにした。その検討の結果として、珍海は平安末期の学僧として、当時の諸宗兼学の時代背景の下で三論、因明、法相、華嚴、密教、浄土等の教義を兼修していたことが知られたとする。

第二章において、著者は珍海の三論宗著作の特徴について検討を行い、その結果として、珍海は吉蔵の『大乘玄論』の八科義を重視しており、『一乗義私記』と『大乘玄問答』のような『大乘玄論』に対する注釈書を著したほか、『三論玄疏文義要』『三論名教抄』の中にも『大乘玄論』の意趣を用いているところが多くあることが知られたという。更に『三論玄疏文義要』の著作年代について検討を加え、珍海は天承年間（1131-1132）から保延六年（1140）までの間にこの書を著したという見解を提示している。

第三章では、珍海の一乗義に対する理解、及び『一乗義私記』の内容構成について検討を行い、珍海は吉蔵の『勝鬘宝窟』と慧遠の『大乘義章』に依って、両師の説を合揉した上で、三乗と一乗との関係について独自の解釈を示していることが知られたという。さらに、吉蔵の『大乘玄論』「一乗義」と珍海の『一乗義私記』との比較を通して、『一乗義私記』「釈名」の内容は『大乘玄論』「一乗義」の「釈名」の内容と相違することが知られ、また、珍海が依った『大乘玄論』テキストは、現在の大正蔵経テキストと異なるものであったと確認できたという。

第四章は、二諦、中道、正観、二智などの三論宗教理の中核となる教学思想について、珍海の解釈の検討を行っている。珍海にとって、八不は三論宗の根本であり、二諦と中道の義を包摂しており、その中道は二諦であり、実相の理にほかならず、その理を証得するのが正観であると著者は解釈する。また、珍海は『三論玄疏文義要』において二智について詳細に検討しているが、その内容は吉蔵説の継承と敷衍であるとする。

第五章では、珍海の教判に対する解釈と、彼の教理思想の特徴について検討している。教判について珍海は吉蔵と同じく仏一代の教説を大乘と小乗の二つに分ける二蔵判に立つが、しかし吉蔵の三転法輪説は衆生を一乗に入らせるための経教に対する判釈に過ぎないので、これを傍論と判定したとして、吉蔵との違いを指摘している。また、教述と論述についての珍海の解釈は、基本的に吉蔵のそれを承けたものであるが、珍海は教述については二諦の立場に立つ解釈を加え、論述については珍海自身の解釈を示していることが分かったとする。

また珍海の三論宗教理思想の特徴として、著者は速疾成仏と逆罪滅除という二つを挙げている。著者によれば、珍海は成仏思想において神通乗を重視している点が吉蔵と小異があると指摘する。また逆罪滅除について、珍海は吉蔵説を受容した上で、懺悔により罪は全て滅除できるが、罪の果報はないとは言えない、しかし正観による懺悔ならば悪業は全て滅除できるとしており、この点も吉蔵との相違点であるとする。

結論部分では、これまでの各章の検討結果を以下の五項にまとめている。すなわち、（1）

珍海の生涯と著作について、(2) 珍海の三論宗著作の特徴、(3) 『一乗義私記』について、(4) 珍海における中道思想について、(5) 珍海の教判と三論宗教理思想の特徴について、の五項目である。各項目のそれぞれにおいて、著者は珍海の思想について吉蔵の影響の大きさを確認するとともに、同時に吉蔵との相違を際立たせることによって珍海の思想的特徴を浮かび上がらせる努力をしている点が見られる。

本論文には叙述の粗さや語句の不適切などの瑕疵が指摘されたが、論旨そのものを損なうものではない。本論文は珍海の三論教学の八不、二諦、中道、二智などの重要教理を検討し、その教学の概要を示している。従来の珍海研究は浄土教思想の研究に偏重しており、これまで珍海の三論教学に関するまとまった成果はほとんどなかったといってよい。その意味で本論文は珍海の思想研究の領域での新たな成果といえることができるであろう。本論文の第五章で、珍海の『三論玄疏文義要』中から吉蔵の『大般涅槃經疏』の逸文十四箇所が著者によって回収されているが、これは先に平井俊栄氏が回収した後を補充する新たな発見といってよい。また、本論文の巻末には珍海『大乘正観略私記』の国訳と訳注が資料として付されており、本邦初訳となるもので、今後の珍海研究の参考資料になり得るものである。

本審査委員会は、以上の点から本論文が博士（文学）の学位に十分値する成果であると評価するものである。